

木村家のあゆみと八幡の民芸品―紙鯉とかんざしの記憶―

杉山 三佳

はじめに

今回の調査における文書の所蔵者である木村家は、長く八幡において油商を営んでおられた。本稿では聞き取りを元に木村家の概略を明らかにすると共に、故木村富彦さん（昭和6年生）氏をはじめとする方々への聞き取りによって得られた八幡の風俗について紹介したい。

1. 木村家略歴

八幡には「播磨屋金持ち、香半地持ち、北の吉屋は衣装持ち」と称される3軒があった。香半とは香具屋半兵衛のことであり、木村家の屋号である。このように八幡で油商として栄えた木村家の初代忠兵衛は東山路仁兵衛の出身である。少なくとも正徳年間より八幡において存在が確認され庄屋を務めていたようであるが、多くはわかっておらず、残されている家康の朱印状との繋がりとは定かではない。二代目半兵衛は養子であるが、宝暦10年（1760）頃より油商を始めたとされている。二代目以降木村家の屋号は香具屋であり、香半と称された。三代目半兵衛吉久は明和元年（1764）頃より醤油製造を行ったが、これは当代のみにて廃止されている。しかしこの三代目によって木村家は資産を大きく増やしている。四代目半左衛門鹿久は人徳に優れた人物であり、また営業は隆盛の域に達し同じく資産を増やした。男山に多くの書籍を献納しているなど文化的貢献も多大である。五代目嘉免は先代鹿久の長女であるが、離縁の後も家業を継続した。六代目半兵衛邦久は養子であり嘉永6年（1853）に家督を相続したが、鳥羽伏見の戦いによって家屋等は焼失した。更に戊辰の大洪水や翌年の堤防の決壊によって木津川改築が行われ、所有地の約半分が川敷となるなど苦難の連続であったという。そのため実家の中田家に一時身を寄せていたが、明治5年（1872）に谷村兵庫の家宅を買い受けて本宅を建造し、現在の場所へ戻ってきたという。鳥羽伏見の戦いでも土蔵が残ったため、貴重な文書が今日に伝わることとなったのである。続く七代半平恒久は先代の異母兄であるが、木村家に養子として入り明治14年（1881）家督を継いだ。病気のため家督は明治39年（1896）長男半次郎に譲ったが、その後八幡荘会議員、八幡町助役などを歴任し山城八幡銀行創立委員にも名を連ね取締役も勤めている。八代半次郎は当代の富彦氏の祖父に当たられる人物であるが、商工協会会長や町会議員、八幡町長を歴任している名士である。

木村さんの記憶によれば、昭和10年頃八幡の道を東に広げる工事が大々的に行なわれたという。

絵図によると常盤大通と名の残る、現在の木村家前の道も拡張された。付近一帯は木村家の土地であり、蔵を一つ潰したものの家屋はそのままの位置である。しかし他の近隣の家は持ち上げて板を咬ませ、家具等を載せたままロープで2メートルほど引っ張って移動させ道を拡げたという。この頃都市ガスが八幡に来ており、電気は宇治電であったと語られている。この道路拡張工事は本来新道まで行う予定であったが、その先に郵便局があったため、その交渉に時間がかかってしまった。というのも当時の郵便局では電話の交換を行っており、電話のケーブルの配管の掛け替えについて話が滞っているうちに戦争が始まってしまったと木村さんの父が語っていたそうである。また付近の土地は水害対策のために地上げがなされており、ガソリンスタンドとして営業する際に3メートルほどの穴を掘ると戊辰戦争時の焼瓦が多数出土したという。

2. 紙鯉

昭和13年に出版された『八幡町誌』には八幡の名物として「紙鯉」が挙げられている。町誌によれば宝暦年間に八幡庄橋本小金川の地に住む桶屋の翁が始めたというこの紙鯉は、厄神詣の路頭で販売されていた。この紙鯉は放生川に放泳する鯉を模ったものであり、護身符のように扱われていたという。現在ではほとんど見ることができなくなったこの紙鯉であるが、木村さんの話によれば戦前までは町内のいくつかの家で作られていたという。木村さんの紹介で、この紙鯉を実際に製造・販売していた山上喬さん、横川イトさんにお話を聞くことができた。山上喬さん（昭和6年生）は現在でも石清水八幡宮にて鳩茶屋を営んでおられる方で、木村さんの同級生である。また横川イトさん（明治43年生）は御年99歳になられる女性である。

紙鯉は布団の下に敷くと床ずれを防ぐと言われており、長患いのまじないとして販売されていた。大きさは様々であり、30センチ程度のものから、半間ほどの大きなものもあったという。大きいものは数枚の紙を貼り合わせて作るほどであった。それぞれを筐にくくりつけ、店先で土産物として販売していたようである。この紙鯉はそれぞれの家で作っており、横川さんも母親と一緒に作っていたという。原料は厚手の和紙で、和紙を木でできた型に当てて鯉の形に切り取り、裁ち屑でヒレや二つに分かれた尾などをつけていた。横川さんの旦那さんが大工で、鯉の型などを作ってくれたそうであるが残念なことにこの型は残っておらず、現在まったく同じものを作ることは不可能となってしまった。鯉は和紙を二つ貼り合わせたものを使用していたため、口をつけて筐にくくりつけると風を受け膨れるようになっていたという。雛壇に置かれて売られる場合もあった。

この紙鯉は白地に黒で鱗などの模様をつけたものと赤地に黒のものがセットとして売られていたそうであるが、山上さんの話によれば青地のものも存在していたようである。横川さんの話では白は男の子、赤は女の子のお守りでもあった。また鱗は一つずつ手作業で描くために人によって上手下手があったという。これには筆ではなく平たい刷毛のようなものを用い、墨に膠を混ぜたもので描かれた。そのため独特な模様と照りがあった。現在販売されているものは比較的鱗が控えめに描かれているが、山上さんや横川さんの見立てによると、従来のはもっと鱗がしっかり描かれており、体軀もスマー

トで立派なつくりであったようである（口絵9）。この紙鯉は正確にいつから八幡で作られ売られていたものかは不明であるが、横川さんの祖母の世代から作られていたようであるため、少なくとも近世後期から近代以降には作られていたということが推測される。横川さんの実家は畳屋を営む堅東家であり、母親である堅東ツルさんの実家は奥村家であった。この奥村家は現在の山柴の公民館の場所にあり、祖父・父親が共に若くして亡くなってしまったために木村家に土地を買い受けてもらったといい、木村家とは縁戚にあたるといふ。横川さんの祖母は八幡宮の灯籠の前で土産物を販売しており、横川さん自身も所帯を持った後にケーブルの近くで土産物屋を営んでいたという。一方で横川さんの末妹である竹内孝子さん（大正10年生）や山上さん自身は紙鯉を製造したことはないようである。

3. かんざし

紙鯉の他にも、縁起物として売られていたかんざしもまた手作りであった。このかんざしは横川さんの記憶によれば5本で1銭と手軽なもので、高価な装飾品ではなく縁起物として売られていたという。山上さんの話でもかんざしは一本いくらではなくまとめて束で販売しており、厄落としとして参詣客に購入された。かんざしの種類もさまざまである。団栗の毬の中に小さなおかめを入れたものや南天の実に雪のようなディテールを施したものなど、身近なものを加工してかんざしを作っていた。横川さんの家では農家からまだ若い稲穂を農家に頼んで購入し、それを黄色に染めたものをかんざしにしていた。稲穂の頃合いが難しく、自ら刈りに行くのだそうだ。忙しい時期では手の皮が破けてしまうまで作ったという。横川さんは母親とかんざしを作っておられたが、特に上手だと人気があり、横川さんのかんざしを目当てに訪れる人もあったそうである。「西陣クラブ」京の職人のページで特集を組まれるほどであった。また基本的に紙鯉やかんざし、弓は正月に売っていたが、正月以外の時期にも求めてくる客がいたようで、販売はしていたそうである。それでもやはり往時の八幡では正月にはかんざしや紙鯉を売る店がたくさん出ていたという話である。

4. 移り行く八幡の風景

戦前の八幡では春にはお千度と呼ばれる祭りや花見、夏には盆踊りなどが行われ木津川の水泳場にも多くの人々が訪れた。1月15日～19日の厄除け祭りには参詣道を一方通行にし、裏道を下り道にしなければならぬほど多くの参拝客で賑わっており、それに伴って多くの家が土産物屋を営んでいた。正月にはテント張りの芝居小屋も開かれた。子どもたちが学校から出て交通整理をする程であったというから、その賑わいは大変なものであったことであろう。紙鯉やかんざしの他にも八幡特産の竹を用いた弓が子どもの玩具として売られていた。こちらそれぞれでそれぞれの家で作られており、熱した竹を木でできた型に嵌め、型に嵌めたまま水につけると形がそのまま安定するのだという。この弓は弧を描いた簡易なものではなく、2つ弧を描く和弓の形をしており、持ち手には藤が巻かれているなど、しっかりしたつくりであったようである。ペンキなどで色も付けられており、黒地のものに金粉を塗したものまであったという。これに矢をセットにしたものを販売していた。他にも鞘のついた白木の刀な

どが土産物として売られていたという。戦時中、資材供出のために男山ケーブルが廃止されたため横川さんは駅前に降りてきたという。しかし以降も土産物屋は残っていたそうである。戦時中は武運を祈る参拝客や千人針を募る人たちなどで賑わいを見せていたが、終戦に伴い参拝客は激減してしまった。山川さんの言によれば「猫一匹通らなくなってしまった」というほどの参拝客の落ち込みにより、多くの家が紙鯉やかんざしなどの製造や販売をやめてしまったのである。時代の流れとは言え、八幡において古くから製造し販売されていた民芸品が姿を消してしまったというのはとても残念なことである。八幡は激動の時代に翻弄されながら、その姿を大きく変えてきたのである。

おわりに

聞き取りによってほとんど今は失われてしまった八幡の名物について多くの生きた情報を得ることができた。当事者の方々の話はとてもリアルで、言葉の端々にはそれぞれの時代の息遣いを確かに感じた。人と人を介して少しずつ浮かび上がってきた決して特別ではない人々の生活を、ここに少しでも記し留めておくことができたならば幸いである。

文書の所蔵者である故木村富彦さんを通じて、鳩茶屋の山上喬さん、紙鯉や簪を製造しておられた横川イトさん、妹の竹内孝子さんにとても貴重なお話を聞かせて頂いた。失われていく風俗を当事者の方々に直接伺うことができるというのは何事にも替えがたい体験であった。ここに謝辞にかえさせていたきたい。



『西陣クラブ』No.220 より
昭和50年頃の横川さんとかんざし



左から横川さん、竹内さん



鳩茶屋と山上さん、杉山

表紙解説

	1 2 3
5	4
(裏)	(表)

- 1 石清水八幡宮本殿楼門の内部
- 2 慶長5年5月25日「徳川家康朱印状」部分（木村家文書）
- 3 木村家の土蔵にて古文書を説明する故木村富彦氏
- 4 石清水八幡宮本殿楼門、背景に神紋
- 5 石清水八幡宮、鳩八幡宮・神紋

配色は、2009年3月「平成の大修造」により、鮮やかによりみがえった石清水八幡宮本殿楼門の朱色を基準とした。

（写真提供 2, 3 八幡市教育委員会、1, 4, 5 石清水八幡宮）



京都府立大学文化遺産叢書 第3集

八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図

—地域文化遺産の情報化—

編集 東 昇（京都府立大学文学部歴史学科准教授）
竹中 友里代（八幡市ふるさと学習館主任学芸員）

発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5

発行日 2010年3月31日

印刷 株式会社 春日
〒630-8126 奈良市三条栄町9-18
